

短報 Short Report

石見銀山領における猪被害とたたら製鉄

佐竹 昭¹

A Historical Study on the Relation between Damages on Farm Crops Caused by Wild Boars and *Tatara* Iron Manufacturing in *Iwami-Ginzan* Domain

Akira SATAKE¹

要旨：石見銀山領（幕領）内陸部では、幕末期に猪による農作物被害が急増しその対策に苦慮している。この地域の猪被害は近世前半にもみられたが、その後しばらく大きな問題にはならなかった。本稿では、美郷町潮の中原家に伝えられた史料をもとに、幕末・維新期の猪被害と捕獲の状況を紹介し、その背景に地域の主要産業であったたたら製鉄の動向との関連を考えてみたい。

キーワード：猪、たたら製鉄、木炭、獣害

Abstract: In the inland region of *Iwami-ginzan* domain, damages on farm crops caused by wild boars had increased from the Late Edo period to the Early Meiji period. Between 1869 and 1871 as many as 153 wild boars were captured by farmers in *Ushio Village*. Wild boar damages on farms had been observed from the Early Edo period, which were not problem for a long time. At the Late Edo period iron manufacturing in the region suddenly became very prosperous. *Tatara* iron manufacturing needed a large amount of charcoal when they produced iron. As a result it had to log many trees where many wild boars inhabited.

Historically speaking, when size of forests was huge, the number of wild boars remained high. It was an usual case that the number of animals diminished when many trees were cut down. That the area they inhabited dwindled meant a relative reduction of the animals. In this case damages on farm crops caused by them consequently, usually decreased. This phenomenon has been regarded as an established theory. However, it was not the case of *Ushio Village* in the Late Edo period.

In this paper I would like to discuss why damages on farm crops rapidly increased, when the iron industry thrived, which meant many trees disappeared.

Keywords: wild boars, *Tatara* iron manufacturing, charcoal, wild animal damages on farms

I. はじめに

石見銀山領（幕領）内陸部では、幕末期から猪による農作物被害が急増している。なかでも邑智郡潮村周辺では被害が大きく、明治2年（1869）9月から約1年半で153頭の捕獲があった。この地域の猪被害は近世前半からみられ元禄3年（1690）には救済を願い出たこともあった。しかしその後しばらく大きな問題にならず、幕末に至って被害が多発するに至る。本稿では、美郷町潮の中原家に伝えられた史料¹⁾によって、まずは幕末・維新期の猪被害と捕獲の状況を紹介する。続いてその背景について、猪の出没は森林にお

ける木炭生産の推移に関わると思われるので、これを燃料とする銀生産やたたら製鉄に着目し、それら諸産業をめぐる経済情勢との関連でこの現象を理解できないか考えてみたいと思う。

II. 石見銀山領内陸部における猪被害の推移

1. 幕末・維新期の潮村における猪被害と対応

元治元年（1864）7月、江の川上流の村々では猪退散の祈祷を出雲大社に依頼した。「近年猪沢山に生じ、依て田畑を徘徊仕り作物喰荒し、色々防方仕り候えども、逆も人力にては防方相叶い難く」（以下引用史料

¹ 広島大学大学院総合科学研究科；Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

は読みやすいように送りがななどを改めた)とある。経費は銀1貫200目、ただし都賀本郷のみ被害がないということで、九日市組のうち都賀行・長藤・上野・畑田・井戸谷・塩谷・酒谷・九日市・片山・千原・石原・熊見・川戸・浜原・潮の15ヶ村が村高に応じて経費を負担した(「猪退参御祈禱入用割合帳」, 九日市組及び潮村の位置は後掲図2参照)。

潮村ではその前年から被害が大きくなっていった。積雪のうちに猪鹿狩りを行おうとしたが「猪狩等の儀は村々先例の左法もこれある趣に候えども暫く猪鹿の障りこれ無く、当時の者ども儀は訳合存せず何角と居り合いかね」と、久しぶりの猪狩りでその作法がわからなくなっており「猪鹿狩定書」を新たに制定したという。本史料は『大和村誌 上』(1981)にも紹介されている。

その内容は、勢子には若く達者なものを上がらせ、一の矢には猪の頭とゆ(肝)、二の矢にはあとのえだ(後肢)、三の矢にはまえのえだ(前肢)、勢子いかり(勢子の分け前)にはあとのえだ一本など、働きに応じて分け前を取り決め、解体の仕方も耳を後ろへのして包

丁を入れるなどと記す。百姓38名連印して庄屋・頭百姓に提出する形式であり、随時に狩りを行っても問題が起らないようにしている。かつて千葉徳爾氏が収集された狩猟の掟書などにも通じる内容であるが²⁾、狩猟業者だけの作法ではなく村民すべての取り決めとなっている。

実際の猪狩りについては明治4年6月の報告がある。表1は、捕獲者(A~J・K)別に明治2年9月からの一期目と、同3年11月からの二期目の捕獲分について表示した。12名のうち9名の村民が2期続けて捕獲している。捕獲者A(二期目のみLと共同)が計61頭(うち犬利用41頭)、J・Kの二人組が計52頭と、犬を連れた場合が多くを占める。「定書」では村総がかりで打ち取りに努めるとするが、実際は得意の村民が中心になったようである。

さらに明治2年5月~9月の10頭分については、詳細な捕獲状況を記す明治4年7月の報告があり、表2に示した。場所判明分について図1にその位置を示している。

これによると、6月末から8月(新暦)までは江の

表1 明治2~4年 潮村猪討ち留め数

捕獲者	明治2年9月~3年10月				明治3年11月~4年3月			
			犬使用分				犬使用分	
	頭数	重さ(貫, 斗)	頭数	重さ(貫, 斗)	頭数	重さ(貫, 斗)	頭数	重さ(貫, 斗)
A	12	1~2			8	1~1.5		
A(L)			15	1~3			26	1~2
B	2	1~1.5			6	1~4		
C	3	1~2			1	2		
D	4	1			2	3		
E	2	1.5			4	2~3		
F	3	1~2			3	2~3		
G					1	3(わな)		
H			5	1~2				
I	3	2~3			1	1.5		
J・K		1~3	25	1~3			27	1~3.5
小計	29		45		26		53	

資料：明治4年6月「猪打留メ数人別共書上帳」による。

総計 153

表2 明治2年5月~9月ほか、10頭分の詳細

月 日		場所	重さ(貫)	討ち留めの状況
史料上	(新暦換算)			
5月20日	6月29日	田代	6	朝、田の畔を掘っていたところを打ち留める
7月10日	8月17日	坂本	4	夜、畑作物を荒らす、堀の中へ追い落とし取る
8月3日	9月8日	ままこ	5	朝、稲をねじる、犬を入れ、追い詰めて取る
8月4日	9月9日	川向	2	朝、稲をねじる、犬を入れ、追い詰めて取る
8月16日	9月21日	惣津	10	畑作物を荒らす、堀へ追い落とし取る
8月24日	9月29日	小丸	7	暮、稲をねじっていたところを打ち留める
9月10日	10月14日	山	3	朝、稲をねじる、犬を入れ、追い詰めて取る
同上	同上	同上	2	同上
9月18日	10月22日	川角	3	朝、田の畔を掘る、犬を入れ、追い詰めて取る
不明	不明	尾崎山?	9	わなへ掛かる

資料：明治4年7月「狩取候猪数并人別書上帳」による。

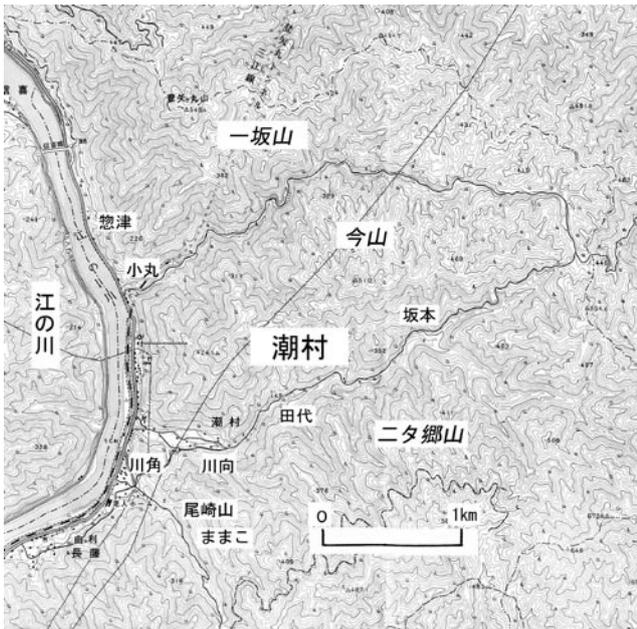


図1 明治2年潮村猪打ち取り場所

注：国土地理院発行2万5千分の1地形図『野萱』に記入

川の小さな支流^{ふたごう}二タ郷川の上流域で、9月になると江の川沿いで稲にとりついて打ち取られている。食物を求めてしだいに里に降りてきたのであろう。猪が本拠とした林野は、一坂山・二タ郷山・今山など旧幕府代官管理の御林であった。

捕獲の方法について、上記史料では鉄砲を使用したかどうかわからない。犬を使った場合は「くい留め」と記すのでかみつかせたのかもしれない。わなに掛かった例では「やりにてつき留め」とする例があり、地域の伝承にある「しし槍」でとどめを刺した可能性も高い。

次に捕獲された猪の大きさについて、6月の報告(表1)では、史料上「壺斗目より式斗目」あるいは「壺メ目より三メ目」という記載が混在し、メ(貫)目を重量とするとあまりに軽量でその意味が判然としない。猪解体後に利用できる肉類の体積、もしくは重量を記したものではないかと考える。一方、明治4年7月の報告(表2)では「目方凡拾メ目位」と記す例があり、すべて上の理解でよいか検討の余地は残る。

この時期の猪の出没は周辺地域でも確かめられる。潮村の南西、浜田藩領と入り組んだ宮内村の医師松島益謙の記録「松氏春秋」(『大和村誌 上』)によると、慶応元年(1865)9月、江の川沿いの吾郷村で20貫目の猪が捕獲され、往診帰りに肢を一本購入したとある。翌年元旦の記事には、去年12月20日から大雪で猪狩りが行われ、浜田藩領矢上・市木・井原などで多くの捕獲があり、江の川筋でも都賀行で50余頭、

前年被害がなかったはずの都賀本郷でも18頭など「村々枚挙に暇あらず」という。積雪が多いと猪は雪の少ない所へ移動するといわれ(高橋, 2008), 狩りが行いやすかったのであろう。

やがて明治12, 3年ごろになると猪の活動は沈静化した。『邑智郡誌』(1937)所引の「布施村誌」によると、幕末に当地を占領統治した長州藩が巻狩りを行い多く射殺したためとする。真偽は不明であるが、その後は大きな問題になることもなくなったようである。

次節では江戸時代前半までさかのぼってこの問題の推移を確かめよう。

2. 江戸時代前半から後半にかけての潮村と猪被害

元禄3年(1690)正月、潮村では奉行所に援助を願う書付を差し出した(「指上ケ申口上書之事(案)」)。それによると、15, 6年前までは山に「切畑」を行って大豆・あわ・くまごを作って飯米にしてきたが、14, 5年前から山が「残らず御立山」にされ生活が苦しくなった。またことのほか山中の村なので「しし・申大分居り申し候て、家の廻りまで出、田畑ほりかゆし、作りものを大分そこない、中々めいわくに存じ奉り候」とある。加えて洪水や前年の不作の実情を訴え、援助を願い出ている。御立山とは先述の御林のことで、当地におけるその制度的成立にも関わる史料である。

このように元禄期においても猪や猿による農作物被害があった。その後寛延3年(1750)には村入用の一項に猪鹿防ぎ銀35匁が確認できる(「寛延三年御年貢并諸入用割賦取立勘定目録」)。開始時期は不明であるが上記のような被害への対策として始められたものであろう。ただ、村入用は一般に経費の増大が制限され定額化する傾向があり臨機応変の効果は望めない。村入用への計上は寛政年間に45匁、問題の幕末安政6年(1859)でも30匁であった。

この間、天保10年(1839)に領内195ヶ村から提出された代官交代引留めの嘆願書に興味深い記述がある。銀山領では「先前は立木生茂、猪鹿狼等立籠、作物喰荒」して困窮していたが、鉄山師たちが「百姓持山は勿論、御林は運上請け仕り、時々伐払候に付、近來に至り候ては、猪鹿の憂も数無く」と、たたら製鉄の燃料として百姓持山だけでなく御林も伐採したおかげで、領内から猪鹿の被害がなくなったと述べている³⁾。

たたら製鉄には大量の木炭が必要で、広大な森林が伐採された。鑪の新設(移転)を申請する際には「鑪山立籠之場所二候間、猪鹿防」のため、などと称し鉄山林の繁茂とそれによる猪鹿の害を強調するのが常である⁴⁾。

銀山領では、江戸時代前半の銀生産が盛んな時期には銀吹炭が必要で、加えて鉄生産用の木炭はその後も引き続き大きな需要があった。その結果、森林はしだいに蓄積量を減じ、猪鹿も生息数を減らしていったと思われる⁵⁾。

鉄生産が順調であれば、猪などの農作物被害は少ないということであるが、では幕末・維新期に一時的に猪鹿被害が急増したのはなぜであろうか。

先の天保10年の嘆願書では続けて、順調であった生産がここ10年来、銚^{すく}や鉄の値段が下落して採算が合わず、休山する鉄山も出ていと記す。銚鉄値段の下落は、寛政末年から問題となり、文化年間や天保年間が深刻であった⁷⁾。

あくまで一つの仮説であるが、たたら製鉄の盛行によって森林伐採が進み、いったんは猪の被害も少なくなったが、文化年間以降、特に天保年間の長い不景気で森林伐採への圧力がやや減じ、猪が増殖する余地も多少は生まれた。ところが、天保末年から銚鉄値段が持ち直し、幕末にかけて未曾有の好景気が続く。その結果、森林伐採が以前より増して徹底的に行われ、山を逐われた猪が急に村里に現れ、しかし多くはすみかをなくしていたこともあって、村人らに討たれて騒動が終息していく、と考えてはどうであろうか。

明確な証明は困難で、他の可能性も考えなければならないが、いくつかの傍証を求めて、次章では銀山領の林野制度とその資源枯渇の状況、さらに幕末にかけての鉄生産の動向について検討する。

Ⅲ. 銀山領の林野制度と近世後期の鉄生産

1. 銀山領の林野制度と潮村の林野

銀山領の林野制度は、幕府代官が管理する御林と百姓山に分けられ、百姓山には村民が個別に所持利用する山と村共有の山がある。銀山領では御林(御立山)も炭生産にあてられ、さらに御囲村32ヶ村と炭方6ヶ村の設定が特徴的である⁸⁾。これらの性格については江面龍雄(江面, 1979)、仲野義文(仲野, 2009)らの研究がある。

御林は、面積的にみてその9割近くが内陸の邑智郡に集中し、しかも長藤・都賀行・潮の3ヶ村の御林だけで領内の4割を占めるという。御林は鉄山師が年季請けし、運上銀のほか吉舎炭とよばれる銀吹炭を銀吹師に納入し、残りは鉄生産に用いることができた。そのためか宝暦・明和期には実際に多くの御林で立木が枯渇し、運上銀や吉舎炭も少額になっていた。次に御囲村は御林設定の村とは重複しないかたちで32ヶ村が指定され、切張・焼木・渡木などの資材・燃料用の

木材を供出した。一方炭方6ヶ村は、御林からの吉舎炭供給が困難になったことを補う意味で、代官川崎平右衛門の時代に始められ、銀山近傍の村が指定されるに至る。

以上は、先学の成果を私なりに要約したものであるが、さらに潮村に即してみよう。

元文3年(1738)の「潮村御林御改被遊反歩間数改帳」によると、御林は一坂山90町歩・今山293.2町歩・二タ郷山582町歩の計965.2町歩である。これは御林全体の15%にあたる。今山は享保18年(1733)から8年、二タ郷山は享保19年から10年、双方とも川本村重郎兵衛が運上銀を負担して鑪山に請け、一坂山も大貫村金九郎が元文元年から10年間鑪山に請けている。さらに宝暦・明和期には、一坂山や今山には樹木がなくなっており、二タ郷山は伐採中という状況であった⁹⁾。

次に百姓山について、元禄7年(1694)「潮村百姓間尺相改帳」によると、67筆に分割され、面積は146町2反3畝であった。所持者は22名、ただし上位2名で54町歩余りを占める。百姓山の位置は江の川沿いの集落や田畑に近接し、谷筋の田畑に添って山中にも入る。

1筆毎に簡単な「植生」が記載されているので表3に示してみた。ごく一部に栗・松もあるが、史料上「小松・柴木」「細木・柴木」「柴木・草」などの組み合わせが多くを占め、いわゆる柴草山である。これらの林野で生産された木炭も「鑪付添村」の制度によって定められた鉄山師に販売されることになっていた¹⁰⁾。

このように、潮村では奥山に御林が1000町歩近くあったが、銀山の吉舎炭や鑪の大炭などに繰り返し伐採され、百姓山も里近くに150町歩たらずあったが、

表3 元禄7年潮村百姓山の「植生」

栗	松	小松	細木	柴木	柴草	草	黒竹	筆数	面積		
									(町)	歩	
○			○					2	0.46		
	○	○	○	○				1	1.50		
	○		○					1	1.86		
		○	○					2	6.26	25	
		○	○	○				5	16.46	10	
		○	○	○		○		11	33.27	2	
		○	○		○			2	4.41	20	
			○	○				6	22.88	10	
				○		○		22	45.01	24	
				○				3	4.03	10	
					○			9	9.74		
						○		1	0.16	20	
							○	2	0.14	29	
注:「潮村百姓間尺相改帳」									67	146.23	

元禄期においてすでに林相は貧弱であった。前章で紹介したように、幕末期に至るまで長く猪の被害がなかったというが、その背景にはこのような林野の姿があったのである。

さて、潮村の御林はその後他村の鉄山師が請けていたが、今山と一坂山および隣村長藤村曲り山（のち半分を佐川清治郎へ売却）は、天保5年（1834）に西田屋幾六から金350両と180両で、二タ郷山も天保14年と安政元年の二度に分けて川本村三上氏から340両で、それぞれ潮村中原氏が請負権を譲り受けたと伝える（「明治九年諸届控」）。西田屋からはほぼ同時に瀬尻鑪も譲り受けている（「天保八年瀬尻鑪算用詰メ目録」）。

天保期の銑鉄値段の下落は、川下村瀬尻鑪の西田屋幾六や川本村土居原鑪の三上氏など、有力鉄山師の経営に大きな打撃を与えるほど深刻であった。そこで、次節では文化年間から天保年間にかけての鉄生産の状況をみておきたい。

2. 銀山領における近世後期の鉄生産

文化2年（1805）3月、銀山領の鉄山師（鑪師）たちは温泉津に集まり、大坂での銑値段の下落について相談した。人件費など生産費を抑える取り決めのほか、取引先の大坂銑問屋を限定し、大坂に代表者を派遣し

て価格維持交渉に当たることを定めている¹¹⁾。参加した鉄山師は14名であった。参考のため天保期を中心とした銀山領の鑪を表4に示した。おおよその位置は図2を参照されたい¹²⁾。

鉄山師たちの会合はその後も行われ、大阪積み登せだけでなく江津での地売りや北国・九州・瀬戸内への直接販売など、それぞれの取引において厳密を期し価



図2 銀山領各組と鑪の分布略図（番号は表4に対応）

表4 銀山領、銑の生産調整

郡名	組名	村名	文化2年, 大坂登録の鑪	天保5年主法案, 鑪と銑の定高 (単位: 駄)				天保7 定高	天保8 定高	天保10 定高	
				鑪	銑定高	増減	国囲い				販売
安農	大田	才坂	① 才坂鑪								
		鳥井	② 百濟鑪	百濟鑪	7000		1000	6000	1500	1400	1400
	久利	静間	③ 和江鑪	和江鑪					1900	1900	1900
磯竹		④ 大浦鑪	大浦(古浦)鑪	2000	-100	380	1520	1200			
邇摩	佐摩	宅野	⑤ 宅野鑪	宅野鑪	2000	-100	380	1520	1900	1900	1900
		湯里	⑥ 湯里鑪	鉄谷鑪	2000	-100	380	1520	1900	1900	1900
那賀	波積	波積本郷	⑦ 波積鑪	波積鑪	2000	-100	380	1520	1900	1900	1900
		渡津	⑧ 長田鑪	長田鑪	2000	-200	360	1440	1800	1800	1800
		太田	⑨ 桜谷鑪	桜谷鑪	2000	-200	360	1440	1800	1800	1800
		下河戸	⑩ 下河戸鑪	下河戸鑪	2000	-200	360	1440	1800	1800	1800
		長良	⑪ 長良鑪	長良鑪	2000	-200	360	1440	1800	1800	1800
邑智	大家	南佐木	⑫ 南佐木鑪	南佐木鑪	2000	300	460	1840	2300	2200	2200
		川下	⑬ 瀬尻鑪	瀬尻鑪	2200	550	550	2200	2550	1700	2550
	九日市	川本	⑭ 土居原鑪	土居原鑪	2400	550	590	2360	2550	2550	2550
		酒谷	⑮ 保閑鑪	保閑鑪	600		120	480	400	400	400
出雲領	濱田領	井戸谷	⑯ 柄ノ木鑪	柄ノ木鑪	600		120	480	400	400	400
		都賀本郷	⑰ 荷越(瀬)鑪	荷越(瀬)鑪	600		120	480	400	400	400
		上野	⑱ 上野村鑪	上野村鑪	600		120	480	400	400	400
出雲領				口田儀鑪	5000		1000	4000	-	-	-
濱田領				西村鑪	2000		400	1600			
濱田領			⑲ 恵口鑪	恵口鑪	?	?	?	?	2600	2600	2600
			合計(駄)		42500	0	8200	34800	29100	26850	27700

資料：文化2年は『新修島根県史資料編3』。天保5年は『大和村誌 上』。天保7・8・10年は「鉄山雑用かん定帳」・「諸入用帳写」・「鉄山諸入用差定帳」による。番号は図2に対応。

格維持のための取り決めを繰り返している¹³⁾。銀山領に隣接する出雲田儀櫻井家の史料では文政2年(1819)にも「諸鉄値段前代未聞の不景気」とあり、鍛冶屋や鑪の場所替えを経費がかさむからと躊躇していたところ、鉄山にますます樹木が茂って猪鹿の被害が出かねないと村民から設置の催促があったという¹⁴⁾。

次にこの問題が大きくなるのは大飢饉を経験する天保年間である。天保5年(1834)には、ついに銀山領の鉄山師たちの間で銑の生産調整に入る。それは、表4に示したように沿岸部の鑪の減産と江の川筋の鑪の増産を含みつつ各鑪の銑生産を定額化するもので、総額42,500駄のうち8,200駄を国囲いとして留保、販売用34,800駄の内訳は、地売り9,300駄、大坂登せ16,000駄、その他の地域に直接売り込む9,500駄という計画であった。

当初大坂積登せの仲間ではなかった九日市組の鉄山師たちも加わり、銑生産を主力とする口田儀鑪とも連携する。天保7年以降の額は実施例である。鉄山師たちは大坂への代表者派遣経費をこの定額に応じて負担し、国元での諸経費は櫻井家口田儀鑪も含めて均等割りとした。九日市組の4カ所は一つの鑪として計算された。これによって銑生産は27,000駄前後に減額となったのである。

一方、出雲の有力鉄山師はこの時期も生産を拡大している。相良英輔は、北国への積極的販売に加え、より付加価値の高い割鉄生産を充実させることで危機を乗り越えていったとする(相良, 2008)。出雲の割鉄生産(販売)額の推移については鳥谷智文の成果もある(鳥谷, 2006, 2008)。これに対して、銀山領など石見地域では沿岸部を中心に銑の生産と販売を主力としていたようである(加地, 2004)。それだけに銑鉄価格の下落が銀山領の古くからの鉄山師により大きな影響を及ぼしたとも考えられる。

文化年間から天保年間にかけて、銀山領では銑鉄価格の下落、とくに銑価格の下落が地域の生産活動に大きな影響を与えたことを述べてきた。これをもって直ちに森林伐採への圧力が減じたとはいえないにしても、一時的にそれが弱まったことは推測できるのではなかろうか。

やがて銑鉄価格は天保飢饉の終息後から上昇に転じて逆に好景気を迎える。加えて銀山領内陸部では古くから銑だけでなく割鉄生産も行われている¹⁵⁾。中原氏関係だけでも幕末には12カ所(『大和村誌 上』)、明治初年には潮村二ヶ郷・今山、川戸村三日谷、片山村九日谷、千原村さる丸などの鍛冶屋が知られる(「明治六年配下村々より書上物帳」)。

これに関連して、中原氏が大鍛冶用の小炭焼成のため、明治13年に伐採申請した官林長藤曲り山17町5反分の調査が注目される。それによると、立木数は21,282本とされるが幹囲3尺以上は37本しかなく1尺未満が19,231本と90%を占めている。それでも10年かけて少しずつ伐採し、合計小炭18石6斗余りを焼成する計画であった(「製鉄仕様炭木輪伐願仕訳書」)。

曲り山は鉄山師が運上請けしてきた旧御林山で、本来鑪の大炭生産にもあてられたところであるが、明治13年当時には上記のように小炭生産がやっとの状態になっている。僅かな事例からの推測であるが、幕末・維新期には潮村周辺においても森林は相当激しい伐採をうけていたようである。猪も秋には木の実を求めて森に戻るはずが、先の潮村の例では里にとどまって討たれている。したがって、この時期の猪の出没は必ずしも従来のように森林が繁茂したからとはいえず、むしろ逆の側面があり、江戸時代における人間との攻防の最後の段階にあったのではないかと考えるのである。

IV. むすびにかえて

たたら製鉄には、まずは鑪の大炭用に30年生程度の雑木が大量に必要であった。これを毎年供給し続けるために伐採地は順繰りに移動していく。地域の山林をすべて皆伐してしまうと(その危機は常にあったが)、たたら製鉄そのものが成立しなくなる。その意味では、常に伐採後の森林は次の伐採候補地として守られている。

したがって猪なども完全にすみかを失うまでは至らず、しかし村里に大きな被害を及ぼすほど増殖する余裕もなく、結果的にそのバランスがこの銀山領でも長く保たれてきたと思われる。また、文化から天保にかけて森林に多少の蓄積が加わったかもしれない。しかしその後の好景気はより激しく森林の伐採を進めた。

幕末・維新期には出雲においても好景気に支えられ、国境を越えての大炭の争奪が行われている(佐竹, 2008)。この時期の猪による農作物被害は、実は銀山領にとどまらず出雲・石見から備後にも及んでいた可能性がある。森林が繁茂して猪が増殖したためではなく、むしろ人間の側の開発行為が猪を追い詰め被害が増幅したという面があるように思う。瀬戸内の島嶼部などにも共通する側面がある(佐竹, 2004)。

ほかにも、猪の天敵とされる狼の減少など動物界からの視角も必要かと思うけれども、紙数も尽きたのでここで稿を閉じさせていただくことにする。

【注】

- 1) 美郷町潮中原義隆氏所蔵文書。以下注記ない限り同文書による。仲野義文氏のご紹介と振井久之氏のお世話で相良英輔先生のもと加地至・鳥谷智文・藤原雄高の諸氏と調査させていただいた。感謝申し上げます。
- 2) 千葉(1969)ほか。千葉(1969)から千葉(1997)に至る著作には貴重な成果が収められている。
- 3) 「料内村々役人一同嘆願書附」『新修島根県史史料編3近世下』(1965)。
- 4) 島根県教育委員会『菅谷鑪』(1968)文献三、主要文書翻刻1,8など。
- 5) 銀山領に限らずたたら製鉄や放牧の関係でかつては中国山地に猪被害が少なく(高橋, 1988), 猪鹿垣の存在もあまり知られていないという指摘がある(矢ヶ崎, 2001)。
- 6) 銑は赤目砂鉄を主原料に銑押し法で生産され鑄物素材となる。真砂砂鉄を主原料とする鋳押し法でも鋼・歩鋳などとともに産出する。さらに銑は大鍛冶屋で一般鉄素材である割鉄(鍊鉄)に加工される。なお本稿で鉄生産と記す場合はこれらの総称とする。
- 7) 価格については野原(1970)及び相良(2004)参照。
- 8) 御林(御立山)は伐採等が制限され猪のすみかになりやすいが(武井, 2008), ここでは事情が異なる。
- 9) 「鑪付添村書上帳」。また文化13年(1816)「御林買山控」には宝暦・明和期に続く御林運上請銀や期間更新記録(西田屋関係)があり運上銀高は減少傾向である。
- 10) 「鑪付添村書上帳」。潮村は浜原村幾六・川本村重郎兵衛双方の添村とされている。
- 11) 「銑鉄下直二付鋳師一統立会申談ル一件」『新修島根県史史料編3近世下』(1965)。この時期、銑鉄流通における大坂商人の地位低下と有力鉄山師の大坂出店が指摘されている(武井, 1972)。銀山領の代表を大阪に派遣した事例も類似の対応とみることができる。
- 12) 銀山領における鑪の分布については加地(2005)のほか児島(2008)などがある。
- 13) 文化年間では、同3年正月, 同11月, 同4年8月, 同5年7月が『大和村誌』上巻。同6年11月は『川本町文化財シリーズふるさとの古文書(近世編)』(1994)。同8年2月は『新修島根県史史料編3近世下』(1965)などに史料収録。
- 14) 『田儀櫻井家たたら史料と文書目録』(出雲市, 2009)所収「年々見合帳」28, 30, 34。
- 15) 「御請鉄員数帳」(『中村家古文書・石見銀山関係古文書集①』石東地域古文書保存協会, 2004)。

【文献】

- 出雲市教育委員会編(2009):『田儀櫻井家たたら資料と文書目録』出雲市教育委員会。
- 江面龍雄(1979):石見銀山と周辺農村。『山陰一地域の歴史的な性格』雄山閣, 221-247。
- 加地 至(2004):明治期島根県石見地方における在来製鉄業の地域的特質。地域地理研究, 9, 1-17。
- 加地 至(2005):石見沿海東部の在来製鉄業と佃谷鋳。『佃谷鋳跡発掘調査報告書』島根県教育委員会, 72-91。
- 川本町歴史研究会編(1994):『川本町文化財シリーズふるさとの古文書(近世編)』川本町歴史研究会。
- 児島俊平(2008):近世・石見の鋳製鉄を探る(5)。郷土石見, 79, 45-56。
- 相良英輔(2004):田儀櫻井家のたたら製鉄業経営。『田儀櫻井家一田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会, 39-48。
- 相良英輔(2008):近世後期松江藩におけるたたらの生産と流通。『たたら製鉄・石見銀山と地域社会』清文堂, 3-28。
- 佐竹 昭(2004):近世広島猪と豚。『近世近代の地域社会と文化』清文堂, 405-429。
- 佐竹 昭(2008):たたら製鉄と備後炭の出雲・伯耆流通。『たたら製鉄・石見銀山と地域社会』清文堂, 53-75。
- 島根県(1965):『新修島根県史 資料編3 近世 下』島根県。
- 島根県教育委員会(1968):『菅谷鑪』島根県教育委員会。
- 石東地域古文書保存協会(2004):『中村家古文書・石見銀山関係古文書集①』石東地域古文書保存協会。
- 高橋春成(1988):自然環境としてのわが国の大型動物—ニホンツキノワグマとニホンイノシシ—。地理科学, 43-3, 15-20。
- 高橋春成(2008):分布域が拡大する日本のイノシシ。池谷和信・林 良博編:『ヒトと動物の関係学4野生と環境』岩波書店。
- 武井弘一(2008):近世の獣害発生と防除。日本歴史, 720, 19-34。
- 武井博明(1972):『近世製鉄史論』三一書房。
- 千葉徳爾(1969):『狩猟伝承研究』風間書房。
- 千葉徳爾(1971):『続狩猟伝承研究』風間書房。
- 千葉徳爾(1977):『狩猟伝承研究後篇』風間書房。
- 千葉徳爾(1986):『狩猟伝承研究総括篇』風間書房。
- 千葉徳爾(1990):『狩猟伝承研究補遺篇』風間書房。
- 千葉徳爾(1997):『狩猟伝承研究再考篇』風間書房。
- 鳥谷智文(2006):近世後期松江藩における鉄師の基礎的考察。島根史学会会報, 43・44, 30-50。
- 鳥谷智文(2008):明治初年出雲地域における鉄山経営の基礎的考察。たたら研究, 48, 20-31。
- 仲野義文(2009):『銀山社会の解明—近世石見銀山の経営と

- 社会』清文堂。
- 野原健一（1970）：近世後期産鉄市場構造の特質。『日本製鉄史論』たたら研究会，271-289。
- 森脇太一（1937, 1972 再版）：『邑智郡誌』植村印刷。
- 矢ヶ崎孝雄（2001）：猪垣にみるイノシシとの攻防—近世日本における諸相。高橋春成編：『イノシシと人間—共に生きる』古今書院，122-170。
- 大和村誌編纂委員会編（1981）：『大和村誌（上・下）』大和村誌編纂委員会。
- （2009年8月31日受付）
- （2009年10月26日受理）